

研究活動報告 園芸療法活動報告

著者	渡里 千賀
雑誌名	心の危機と臨床の知
巻	13
ページ	162-163
発行年	2012-02-29
URL	http://doi.org/10.14990/00002744

園芸療法活動報告

学生相談室では、二〇〇〇年度より、人間科学研究所との共同研究事業として、園芸療法に関する二種類の活動を行っている。一つは、学生相談室で毎週金曜日の午後に学生向けに開催している「Re・アワー」のプログラムの一環として実施する活動、もう一つは、学外から専門の講師を招き、一般公開の「園芸療法研修会」を開催することである。後者の方は、講師との日程調整がうまくできずに、今年も残念ながら開催できなかった。研修会は、日々の活動を振り返り、新しいアイデアや工夫点を取り入れることのできる機会となる。今後の開催に近づけるよう努力していきたい。

今年の「Re・アワー」では、園芸療法プログラムを前期後期合わせて四回実施した。内容は、鉢の寄せ植え（五月、十月）、サツマイモの苗植えと収穫（六月、十一月）である。

五月に、「春のガーデンング」と銘打って、植木鉢に季節の草花の寄せ植えを行った。このセッションは、自然に触れる体験の入門編となり、参加者が土の感触や草花の香りを直に味わうことができる。また、仕上がった植木鉢は、学生相談室内やエントランスに飾られ、他の相談室来室者に季節を感じてもら

うことができる。今年も赤や紫や黄色といった春ならではの色彩豊かな花々を、相談室利用者やスタッフ皆で楽しむことができた。寄せ植えでは、生きている植物を扱うため、完成した植木鉢の中は、日々成長し変化していく。携わった参加者が、来室時にその成長過程を鑑賞できることも、寄せ植えの得がたい特性の一つであると考ええる。

十月には、前の週に作ったエコポットにグリーンを寄せ植えた。エコポットとは、「漆喰を素材にし、粘土細工のようにこねて形を作り、自然乾燥させて出来上がり」という焼かない植木鉢のことである。時がたてば漆喰は土に返りゴミにならないという「エコ」である点だが、名前の由来である。いざ作ってみると、漆喰を形成するのがかなり難しく、鉢の仕上がりは、思ったより小さいものとなった。そのため、寄せ植え用に高さのある植物や花を選択できず、一つの鉢に小ぶりの観葉植物を一種類だけ植えることになった。数種類の植物の寄せ植えはできなかつたが、参加者にとつて、手作りの世界で一つだけの自分だけの鉢は、愛着のあるものとなったようで、各々、気に入った植物を楽しそうに選ぶ姿が見られた。次回は、苔なども加えてポリウムのあるものに仕上げてみたい。

六月に園芸療法スペースの畑にサツマイモの苗を植えた。土作りと畝作りから始めるのだが、耕すという行為は、学生達にとつては非日常のものである。汗をかき、ふだん使わない筋肉

を酷使し、かなりの重労働に感じるようだ。服や靴に汚れがついてしまうのも敬遠される。そのせいか、他のプログラムと比べ、参加人数はここ数年増えていない。生命をはぐくむ土に直接触れる行為は、園芸療法の醍醐味を味わえ、体験から得ることも多い機会なのに、非常に残念である。しかし、十一月にはダンボール箱いっぱいのおやつマイモが収穫できた。収穫した日にはサツマイモごはんを試食し、二週間後に収穫したサツマイモ餅（おやき）を調理した。おやきは、初めて挑戦した料理であったが、調理過程が簡易で、サツマイモそのものの味を堪能できた。生地を、うさぎや魚、ハートなど好みの形に形成してホットプレートで焼く過程もあり、参加者は楽しそうに取り組んでいた。春の苗植えと秋の収穫の両方に参加する学生は少なく、継続して世話することもないため、苗の成長過程を順を追って見ることはないが、断片的であっても植物の一生の節目節目に立ち会う体験は、学生の心の成長にもよい影響を及ぼすと考えられる。

今年度も、春の寄せ植えから秋の収穫、そして調理・試食まで、季節の変化を感じ、味覚、触覚、臭覚など五感を刺激される体験として、園芸療法を実施できたが、参加者が一〜二名と少なく、〇名のときもあった。しかし、対人関係が苦手な学生同士が集い、植物や土の中の生き物を介してゆっくりしたペースで相手に心を開いていくさまを見ていると、植物の持つ成長

力、治癒力と共に集団の持つ相互作用を実感することが多い。今後もぜひとも継続していきたい活動であるが、活動の準備、継続にかかるスタッフの負担の大きさ、参加人数の少なさなど、工夫すべき課題は多い。また、植木の根がはびこり、利用できぬ畑が半減していること、散水機が故障し夏休み中の水やりをどうしていくかなど、今後の園芸療法スペースのメンテナンスの問題もある。緑豊かな相談室を維持していくことや、学生に自然に触れる体験を提供していくことの必要性は、学生の反応からも日々実感することは多い。いかに学生にアプローチできるかを考えながら、実践を重ねていきたい。

（渡里 千賀）